歴史地震
第37号 (2022) 124頁

［講演要旨］

1454 年享徳地震津波と 1611 年慶長奥州地震津波の比較分析

東北大学災害科学国際研究所　蝦名裕一

§1. はじめに

東日本大震災以降,東北地方太平洋沿岸の歴史地震・歴史津波について様々な研究成果があげられ,その像は旧来の定説から大きく転換されつつある.

まず,東日本大震災に前後して,岩手県から宮城県にかけての沿岸各地で,貞観十一年(869)以降の津波堆積物の発見が相次いだ(澤井 2017). 炭素年代測定によって,この堆積物は 15 世紀から 17 世紀にかけてのものであることが特定されている. また,東日本大震災をうけて,慶長十六年(1611)に発生した慶長奥州地震津波の文献史料についての再検討がおこなわれ,従来は同一視されていた昭和八年(1933)の昭和三陸地震津波の地震規模より大きいものであることが指摘された(蝦名 2013). 加えて,東日本大震災後に,享徳三年(1454)にも「奥州」で津波が発生したとする『王代記』の記述から,東北地方太平洋沿岸で発生した新たな歴史津波の存在が確認された(行谷・矢田 2014).

これらの発見をうけて,一般に「千年に一度」ともいわれていた東北地方太平洋沿岸における巨大津波の発生周期は,より短い数百年間隔であるというのが一致した見解となりつつある. 一方で,貞観津波,享徳津波、東日本大震災が約600年間隔で発生した巨大津波とする見解も示されているが,その津波規模の推定には若干の問題が残る.

よって本報告では,享徳地震津波と慶長奥州地震津波についての情報を整理し,東北地方太平洋沿岸における歴史津波の発生の状況や周期について学際的な見地からの論証を試みることにする.

§2. 享徳地震津波について

山梨県普賢寺に残る『王代記』には,「同(享徳)三年甲戌十一月廿三日夜半天地震動,奥州ニ津浪打テ百里山ノ奥ニ入テ人多海ニ入テ死」と記されており,貞観津波から慶長奥州津波の間に大きな歴史津波が発生していたことが新たに確認された. また,享徳津波に関連して,仙台平野では貞観津波から東日本大震災までの間に2層の津波堆積物が発見された地点が存在すること,またこれに関連すると考えられる板碑などから,その存在が裏付けられる.

ただし,その被害規模や範囲について,「百里」という記述を海岸線にあてはめる解釈の可能性も指摘されるが,当時の奥州に対する一般的な地形認識や,全国的に1里＝36 町(3.9km)が定着するのが太閤検地以後であることなどを踏まえると,この言葉が東北地方太平洋沿岸全域を示すという解釈は困難がある.

§3. 慶長奥州地震津波について

慶長奥州地震津波について,同時代史料の直接的な体験者としての『ビスカイノ報告』をはじめ,仙台藩の『真山記』,相馬中村藩の『利胤朝臣御年譜』,松前藩の『松前家譜』といった奥州諸藩の記録,また盛岡藩領の沿岸部では宮古地域の『小本家記録』,山田地方の『武藤六右衛門所蔵文書』,大槌地域の『大槌古舘城内記』などの史料が,その津波被害について記している. それぞれの史料に若干の情報の錯綜はみられるものの,津波被害の記述に関して,現段階では虚偽や作為は見受けられないことから,この津波が奥州沿岸の広範囲に被害をもたらした事実は確認できる.

加えて,岩沼市史編纂委員会(2021)によると,平成二十五年(2013),岩沼市新菱沼の高大瀬遺跡の発掘調査の際,貞観地震津波と東日本大震災による津波による堆積物の間から発見された砂層を平面的に調査した結果,人や牛馬の足跡,すなわち水田耕作の開発痕が確認されている. 仙台藩の記録によると,慶長期より藩内各地で家臣団による新田開発が展開しており,検地帳からは特に沿岸部の水田化が顕著に進展していたことがわかる.

§4. おわりに

以上の事から,現段階の成果を総合すると,次のようにまとめられる.

①享徳地震と慶長奥州地震ではいずれも東北地方太平洋沿岸に被害がもたらされた.

②津波被害の広域性については,慶長奥州地震津波＞享徳地震津波とした方が,現段階での歴史学・地質学・考古学のいずれの研究成果とも妥当性が得られる.

参考文献

蝦名裕一,2013, 慶長奥州地震津波の歴史学的分析,宮城考古学,15,27-43.

岩沼市史編纂委員会,2021,『岩沼市史 2 通史編Ⅱ近世』,岩沼市,344－345.

行谷祐一・矢田俊文,2014,史料に記録された中世における東日本太平洋沿岸の津波,地震,66, 2 輯,73-81.

澤井祐紀,2017, 東北地方太平洋側における古津波堆積物の研究,地学雑誌,123 巻,10 号,819－830.